

# 現代カトリック作家としての ジュリアン・グリーンと グレアム・グリーン

渡 辺 洋

ジュリアン・グリーン Julien GREEN(以下Jとする)とグレアム・グリーン Graham GREENE(以下Gとする)は、1900年とその四年後の1904年という今世紀のはじめ、ほとんど同じ時期に生を受け、現存し、仏英を代表するカトリック作家としてその名を広く一般に知られている。この両者はその動機は違うが、ある年令を経た後、カトリックへ改宗したという点では共通している。しかし、その作風は非常に異っている。前者が孤独と悪夢、不安と苦悩、死と狂気といった特異な世界に生きる「閉ざされた」人間を描いているのに対し、後者は同様に不安や虚無をとり上げながらも、追う者と追われる者という図式に乗ったり、社会とのつながり——世の中を憎悪し、反旗をひるがえすアウト・ローであったとしても——をもつ人間を描いている。一言でいえば「静」と「動」という両者のコントラストは、Jが兩次大戦を通じて40年以上の長きにわたって、いかなる時にも政治にくみすることなく、社会と袂をわかち、もっぱら人間の内面を追い求めてきた作家であるのに対し、Gは若き日から好奇心に富み、オックスフォード在学中から新聞の編集にたずさわり、戦時には情報省や、外務省に身をおくという活動的な作家であるという生来的な気質の相違によるものであろう。それは彼らの作品に目を通した人なら誰れでもすぐ感じとることのできる違いである。小説の舞台一つを例にとってみてもJが「母の国」アメリカ南部とフランスの田舎町に限定しているのに対し、Gはイギリスにかぎらず世界のさまざまな国にそれを設定している。したがって、彼らが描く小説の筋、枠組、人物たちだけについていえば両者の間に共通点を見い出すことはむずかしい。

しかし、Jは「机が木から作られるように、小説は罪から作られる<sup>1)</sup>」といい、Gも「悪はいついかなる時でも人間に宿る。人間は黒か白かではなく、黒か灰色なのだ<sup>2)</sup>」といい切る程にこの二人のグリーンが描くのは罪や悪にまみれた現代に生きる人間なのである。彼らの言う悪とはアダム以来の人間の原罪にかかわるものであり、罪もまた超越者＝神との関係において存在する人間存在自体を指している。彼らの背後にカトリシズムの思想が厳然とひかえていることは言うまでもない。今日の作家は「苦悩する」とか「荒涼たる」という言葉を上に冠して現代の精神風土を言い表わしているが、こうした現実からの脱出をはかるには、まず原罪の認識からはじめなければならないとカトリック作家たちは主張している。

この小論では、悲劇の時代に生まれ、カトリックという信仰の点で共通の地盤に立つこれら

1) Julien GREEN, *Journal*, tome II, (1949~1966), Plon, 1969, p. 1158.

2) Graham GREENE, *The Lost Childhood and Other Essays*, Eyre and Spottiswoode, 1954, p. 16.

二人の作家の文学を通して、罪や悪がどのようにとらえられているかを検討し、あわせて現代小説におけるカトリシズムの問題を考えてみたい。

## I

ところで、彼らの小説作品にふれる前に、奇しくもこの両者が各自の幼少年時代の思い出を赤裸々に告白しているJの『夜明け前の出発』*Partir avant le jour* (1963)とGの『一種の伝記』*A sort of Life* (1971)に目を通してみたい。

Jはこの告白を書くに際して「人間の幼少期というものは、秘密のいつぱいつまった戸棚であり、その戸は大きく開いてみる必要がある」と述べている。たしかにこの本をひもといてみれば、罪に対してあるいは悪に対するとぎすまされたJの感覚は想像以上のものであり、彼が生まれながらにして、将来カトリックへ帰依する資質を持っていたことを証明しているといえよう。この点、GはJほど強くカトリックを意識して幼少年期を送ってはいない。このことは彼らの改宗した年齢——Jが16才の時であり、Gは22才のとき——からも当然であろう。

小説作品同様、この「告白録」も内容、記述の方法など異ってはいるが、いずれにしても両者の作家としての自己形成の過程をうかがい知るに足る貴重な参考資料である。Jが詳細に個々の問題について記憶の糸を丹念にたぐりながら書き綴っているのに対し、Gはかなり大雑把に、年令的な巾も4,5才から28,9才までを対象に一気に書いている。

その中から、実際に両者が共通した事柄——子供、恐怖、悪魔——について語っている部分を抜萃してみよう。

「子供というものは、動物たちのように大人の目には見えない無害な存在物のすべての世界が見えるらしい<sup>3)</sup>。」(J)

「少年期には永遠は何んの意味ももたない——子供はまだ希望することを教えられてはいないからだ<sup>4)</sup>。」(G)

「6才をすぎた頃の私には、いわくいいがたい暗闇への嫌悪感があった。もし私が恐怖というものを知ったとしたら、それはまさしくこの嫌悪感からきているのだ<sup>5)</sup>。」(J)

「夜、ベッドまでのこの狭い階段は、まさに恐怖の頂点だった——どんなものが待伏せしているかわからないのだ<sup>6)</sup>。」(G)

「両親の部屋にあった衣裳戸棚をいきなりあけた。そして悪魔を呼び出してみた。そこに悪魔がいると私は

3) J. GREEN, *Partir avant le jour*, Grasset, 1963, p. 17.

4) G. GREENE, *A Sort of Life*, The Bodley Head, 1971, p. 59.

5) J. GREEN, *op. cit.*, p. 78.

6) G. GREENE, *op. cit.*, p. 47.

実際に考えていたのだ<sup>7)</sup>。」(J)

「母が私の目にひどく威厳があるようにみえたのは、衣裳戸棚を監督していたからで、そこには恐しい魔女がひそんでいたのだ…<sup>8)</sup>。」(G)

同一のテーマに対して同じように書かれた箇所を敢えてとり上げてみた。引用部分が余りに短かすぎて明確さを欠くかもしれないが、ここにも両者の根本的な違いがみられる。とくに、恐怖心というものは人間のいろいろな感情の中でも最も根源的なものであろう。したがって、程度の差こそあれ子供は本能的に未知なるもの——闇、悪魔——に対して恐怖感を抱く。だが、Jの恐怖心は並はずれたものであり、病的でさえあった。たとえば、上に引用した衣裳戸棚に対する恐れは事あるごとに彼の脳裡をかすめるし、「4才から10才までをすごした自分の部屋の中にこそ恐怖が巣喰っていた<sup>9)</sup>」と告白し、「悪魔は一步たりとも我々から離れない<sup>10)</sup>」と述べている。言ってみれば、Jにとって夜とか恐怖とか悪魔は常に身近な実感として存在していたことになる。また彼は『日記』 *Journal* の中で、「私のすべての本では、恐怖やその他何でも強い感動を表わすとき、どういうわけか階段と結びついているようだ<sup>11)</sup>」と述べており、一見、相通じるようにもみえるが、Gの場合は子供なら誰れもが感じる恐怖心であり、「恐怖に対して奇妙な魅力<sup>12)</sup>」さえ憶えているのである。Jがいう自分から片時も離れない悪魔とは当然ながら神と対峙する存在であった。

このような幼時体験の記述から考えられる両者の相違は二人の持って生れた性格にもよるのだろうが、家庭環境や母親の教育にその因があったことも看過できない事実である。Gが母について語っている部分は通り一遍であるのに対し、Jのそれは母の描写で埋っているとさえいえる。幼いJにとって母の胸はあらゆる外界の脅威から常に自分を保護してくれる唯一の心休まる避難の場であった。三人の姉を持つ末っ子の男の子という特殊な姉弟関係の中で、母の寵愛を一身に受けて成長したJであったが、その母はまたピューリタンを想起させるような厳しい宗教的雰囲気の中で彼を教育しようとしていた。『夜明け前の出発』の随所に見られる母にまわりつき彼女と楽しそうに語らう幼き日の彼の姿は当時の異常とも思えるJを浮き彫りにしている。しかし、Jに幸せな日は続かなかった。「まるで恋人のようだった<sup>13)</sup>」母は彼が14才のとき若くしてこの世を去る。人一倍繊細な神経の持主であり、最も感じ易い年令にあったJにとって、最愛の母親を亡くすというこの不幸がどれ程彼の心に悲惨な傷跡を残したかは説明するまでもなからう。この生れてはじめて体験した冷酷な現実こそ、父に続いてJをカトリ

7) J. GREEN, *op. cit.*, p. 18.

8) G. GREENE, *op. cit.*, p. 17.

9) J. GREEN, *op. cit.*, p. 15.

10) *Ibid.*, p. 19.

11) J. GREEN, *op. cit.*, tome 1, (1928~1949) p. 120.

12) G. GREENE, *op. cit.*, p. 29.

13) Cf. J. GREEN, *op. cit.*, p. 191.

ックへ帰依させた直接の動機だったのである。

Gは自分の改宗について語りたがらないといわれているが、一般にはオックスフォード大学在学中の恋の相手ヴィヴィアン・ディレル・ブラウニング Vivien DAYRELL-BROWNING がカトリックであったためとされている。いずれにしても、Jとカトリックの邂逅とGのそれにはその動機、その態度において大きな違いがあったことは否定できない事実なのである。

このように身体のすみずみまで宗教色がしみ込んでいるはずのJではあるが、彼の描く小説はGに比べ宗教臭の少ない作品が多い。国柄が違い、家庭環境に差があり、改宗の動機も異にしながら、「カトリック作家」という点では共通するこの二人のグリーンが彼らの小説の中で描くカトリシズムとはどのようなものなのか。両者の代表的作品を通して実際に検討してみよう。

## II

フランスだけでなく、英米においても高く評価され、作家として確固たる地位を占めるにいたったJの代表作は、1927年に出版された、主人公の名前がそのまま小説の題名になっている『アドリエヌヌ・ムジュラ』 *Adrienne Mesurat* であろう。18才になるアドリエヌヌは、かつては習字の教師をしていた退屈な父親と17も年が違い胸を患っているヒステリックな姉ジェルメーヌ Germaine とともに「あかしで荘」と呼ばれる大きな田舎屋で単調極まりない生活に激しい嫌悪を感じながら毎日を無為に送っている。60と35と18という人物たちの不釣り合いな年齢構成からも察しられるように、彼らは実の父娘、姉妹であるにもかかわらず、精神的には何んのつながりもなく、各自が孤立し、憎悪し合って生きている。Jの人物たちの特徴であるが、こうした習慣的的日常性に死ぬ程の倦怠感を覚え、三者が三者とも脱出 *évasion* の機会をうかがっている。そんなある日、アドリエヌヌは、偶然近くの「白い離れ家」に住む医師モルクール Maurecourt に出逢う。それからというもの彼女はこの男を思い続けるようになる。アドリエヌヌの目には、彼が脱出の手掛りをつけてくれる心強い相手としてうつったからであろう。だが、すぐにジェルメーヌの知るところとなる。そこでジェルメーヌの家出を助けることで、まずこの姉からの束縛を逃がれ、自由を手に入れようとする。姉の家出を知った父は半狂乱となり、激しくアドリエヌヌを叱責する。そしてモルクールとの仲を引き裂かれる危険を感じた彼女は、父親を階段からつき落とし、殺してしまう。彼女をとりまいていた一切のしがらみから完全に解放されたかにみえるが、以前にもまして恐しい孤独感におそわれ、耐えきれず旅に出る。しかし、結果的には「あかしで荘」の中でしか生きてはいけないという厳しい現実を再認識させられたにすぎない。かすかな望みであった医師の助けも得られず、Jの多くの人物たちの例にもれず死か狂人になる以外に脱け出せない「閉ざされた庭<sup>14)</sup>」の中で、目に見えない壁に向っての衝突をくりかえし、主人公アドリエヌヌが発狂するところでこの小説は終ってい

14) 『アドリエヌヌ・ムジュラ』の英訳の題名、*The closed Garden*, 1928年に出版されている。

る。

以上がこの作品の梗概であるが、J自身この結末について、「アドリエヌスが窓から身を投げるところで終るはずだった<sup>15)</sup>」と述べている。しかし、実際にはそれ以上に悲しい最後となっている。

一読してまず感じるのは、これがカトリック作家の手による作品なのだろうかという単純な疑問であろう。カトリック文学における作中人物のすべてが聖人や善人ばかりではないにしても、一人の司祭も、一人の好人物も現われず、登場するのは実の父親を殺す娘や、売春婦らしき女、非情な男だけである。もっとも、Jの作品に関していえば、『アドリエヌス・ムジュラ』に限らず、数少ない例外は別にしても、主人公はもとより、副次的人物たちも一様に陰惨で、悪人とはいえないにしても、「抗しきれぬ力」*irrésistible force* によって没理的な行為に走る人物たちなのである。

すでに述べたように、Jの文学の本質は、外界から隔絶した人間の内奥を探求しようとする点にある。したがって、どうしても彼の小説のテーマは、孤独や宿命といった実存的苦悩から人間がいかにしたら逃れられるのかというところに限定される。目に映じる現実世界は、罪や悪に満ちあふれ、孤独、不安、倦怠がうずまく場ではない。Jの人物のすべてが、現実否定——脱出——の方向へ向うのもこのためである。ただ彼らの現実逃避の方法は必ずしも一致してはいない。アドリエヌスの場合は幻想を抱くことによってであったが、彼女の父親やマニユエルManuel<sup>16)</sup>の叔母は *sadique* な手段によってである。また、ある人物たち<sup>17)</sup>は本能的なこと——自己の肉体を投げ打つ——によってこれを果そうとしている。しかも、それらは真の意味での *évasion* ではなく、みせかけの自由を一時的に手にしたにすぎず、『アドリエヌス・ムジュラ』のあらすじで述べたように彼らの試みは無に帰するのである。

しかしながら、Jの人物たちについて注目すべきことは、少量の毒薬を日毎に盛りながら夫を殺害しようとするテレーズ・デケルウを彷彿とさせるアドリエヌスも、彼女に対してひややかな父姉も、一般的な意味での罪人としては描かれていない。言葉を換えていえば、Jは彼の人物たちを宿命的な人間としてしかみていないということである。何故ならすべての人間が原罪という罪を背負って生きているからである。カトリック作家の文学が、ややもすれば罪や悪に加担しすぎるといふ批判を受けるのもこうした点にあるのだろうが、*parricide* の罪を犯したこの主人公も救われるのであろうか。作者Jは何も語ってはいない。

一方、Gの名声を全世界的にした作品といえば、やはり1940年の『権力と栄光』*The Power and the Glory* であろう。彼自身、自分の作品を「ノヴェル」と「エンタテインメント」に分けているが、この分類の仕方は、今日、必ずしも正確ではないといわれている。そのこと

15) J. GREEN, *Œuvres complètes*, tome I, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1972, p. 1128.

16) 『幻を追う人』*Le Visionnaire* (1934) の主人公。

17) 上記のマニユエルや『モイラ』の主人公ジョセフ・ディをさす。

はさておき、この小説が、「ノヴェル」の中の『ブライトン・ロック』*Brighton Rock* (1938)に次ぐ第二作であることに異議をさしはさむ余地はない。小説の舞台はいかにもGらしくメキシコの片田舎にあるタバスコ州である。革命政府はすべての教会、すべての司祭を排斥することに全力を注ぐ無神論者の集りである。その中で唯一人ふみとどまっているのが、この小説の主人公ウイスキー司祭 Whisky priest である。彼は聖職者でありながら、女と関係し、子供まで作り、その名のおり酒浸りになっている破戒坊主である。この墮落しきった司祭が、迫害を逃がれ、その州から脱出しようとして船を待っているところから物語ははじまる。しかし、自由と生命の安全を約されている乗船を目前にして、この主人公は、危篤の母が救いを求めているという少年のいつわりの言葉にしたがい、今、逃がれて来た道を奥地へとひきかえす。この地にとどまるということは、彼自身が危険であるばかりでなく、彼の周囲の人々をも危険にさらすことを知りながら彼にはこの道を歩むしかないのである。やがて、かつての自分の教区に足を踏み入れる。そこで彼が見るのは、悪意に満ちた眼差しを自分に向ける彼自身の娘の姿である。その間にも官憲の手は伸びてくる。再び賞金稼ぎの混血児につきまといながらのあてのない逃亡生活が続く。ブランドーの不法所持から、一度は獄舎につながれる身となるが、見破られることなくすぐ釈放される。Gの「エンタテインメント」を思わせるスリラー形式の筋書である。ようやくにして平安の地にたどりついたかにみえるが、この司祭にとって身の安全を得ることは永遠にできない。強盗犯人が、終油の秘蹟を受けたいという混血児の伝言により、再度自分の運命に向って歩を進め、結局は待ちかまえていた警部によって捕えられ、銃殺されてしまう。

『アドリエヌ・ムジュラ』に比らべれば、非常にカトリック的色彩の強い作品である。表題の『権力と栄光』が聖書の「神の栄光と力」からの引用であることは歴然としており、主人公はたとえ墮地獄の罪を犯しているとはいえ、まぎれもないカトリックの司祭なのである。こののんだくれの司祭は、彼の脱出を妨げる少年や混血児の意図を十二分に予見しながら、自ら進んでわなに落ちていく。いかにも「神の御心のままに」という受身の姿勢をとり続けている。ミサも満足にできないような司祭でありながら、それでも自分を必要としている人間がいるかぎり、言い換えれば、神が自分を必要としているかぎり、自己を犠牲にして他を思いやるウイスキー司祭である。死を前にして、「…神よ、私は自分の犯したすべての罪を悔い許しを乞い…十字架にかけられます<sup>18)</sup>」と祈り、苦痛の恐怖もなく刑場の露と消えるこの主人公はキリストの似姿となっている。しかも、この小説は主人公の死で終らず、彼の死が、生前、接触のあった人々——わなにかけた混血児や、彼を捕え銃殺に追いやった主任警部にさえ——に不思議な影響を与え、戸口には早くも新たな司祭が現われるという結末になっている。

以上、二人のカトリック作家によって書かれたいかにもカトリック的な小説と相反するものを敢えてとり上げてみた。

18) G. GREENE, *The Power and the Glory*, Heinemann, 1963, p. 273.

もつとも、この両者を、簡単に「カトリック作家」と呼んでいいのか、また、Jの『アドリエヌ・ムジュラ』という作品を「カトリック小説」とみなしてよいものかどうか問題はあろう。しかし、少なくとも、彼らはカトリック教徒であり、彼らの背後にはカトリシズムの思想が流れていることはたしかである。

それでは、「カトリック作家」、「カトリック小説」あるいは「カトリック的小説」とはどのようなものであろうか。

### III

前章で引用した『テレーズ・デケルウ』*Thérèse Desqueyroux*の著者フランソワ・モーリャック François MAURIAC も代表的カトリック作家といわれた人であるが、彼は自分が「カトリック作家」といわれることに反論して、「カトリック作家ではなく、小説を書くカトリック教徒である<sup>19)</sup>」と言っている。Jも親友ジッド André GIDE との対話の中で、「カトリック作家の仲間に関われることは大変迷惑なことだ<sup>20)</sup>」と語っている。まず、人間でありその人間がカトリックを信仰し、たまたま小説家になったと考えれば彼らの言うことは当然すぎるくらい当然のことである。

しかし、両者の反論は「カトリック作家」というレッテルを貼られることに対する抵抗、いつてみれば、他人がどうみるかは関知しないが、自分たちは「カトリック小説」あるいは「カトリック的小説」などを書こうとも思っていないし、書いてもいらないと言いたいのであろう。

ここでもう一度、Jの信仰の歴史をふりかえってみよう。彼がカトリックへ改宗したのは、母の死後、16才のときであったことはすでに述べたとおりであるが、その後、Jはカトリックの信仰に対して懐疑を抱く。とくに、フランスにおけるカトリックに対して、伝統の上にあぐらをかき余りにもその信仰が微温的になっているのではないかと痛感し、1924年には、『フランスのカトリック教徒への反論』*Phamplet contre les catholiques de France*と題した小冊子を変名で発表している。それとともに、自分自身の中のカトリックの問題について再考しているのである。彼が再びカトリックをはっきり見出すのは、1939年、39才のときであり、これを「第二の改宗」と彼自身言っている。

この事実から、Jの1924年から1939年にいたる間の作品は、カトリック小説ではないという論もある。J自身、この改宗の後、「自分はこれまで当初のパンフレットを除いては、『モイラ』*Moïra* (1953)、『真夜中』*Minuit* (1936) のアニエル Agnel という人物、さらには『仇敵』*l'Ennemi* (1954) の中で遠回しに表現した以外、作品の中で自分の信仰について語ったことは決してない<sup>21)</sup>」と断言しているのである。たしかにJの言うとおりにあられない。

19) Cf. Pierre-Henri SIMON, *Mauriac par lui-même*, Seuil, 1963, p. 53.

20) J. GREEN, *op. cit.*, tome I, p. 11.

21) *Ibid.*, tome II, p. 1209.

しかし、カトリック教徒の作家が、その作品の中で自分の信仰を披瀝した小説だけが、「カトリック作家」の書いた「カトリック小説」ということにはならない。Jの場合にしても、1939年以降の作品が、「カトリック的小説」であつて、それ以前の作品はその範疇には入らないとはいえないのである。たとえカトリックに対する気持に動揺があり、一時的に教会から遠ざかったとしても、キリスト教の信仰を捨てられないJが、他の宗教に心を動かすはずはなかった。おそらくより深くカトリックについて考え悩んでいたであろうし、そうしたおりに書かれた作品の裏にはカトリックを模索するJの姿が、より鮮明に写し出されていたとさえ考えられるのではないだろうか。

参考までに、最も宗教的といわれる作品『モイラ』について簡単に検討してみると、主人公は18才の大学生ジョセフ・デイ Joseph Day である。彼は厳格なピューリタンの教育を受けたジャンセニスト的純粋主義者であり、日常生活においても極端な禁欲主義をつらぬいている。しかし、その内部では情欲に対する激しい情念が渦まき、対立し、激突するという不均衡な性質が、犯しがたい罪を犯させ決定的な破局へと彼を向わせる。ジョセフは、悪や罪や不純を呪いながら、情欲の象徴のような娘モイラに魅かれ、侮辱されたことに激怒し、彼女を犯し殺してしまう。

この小説の中心テーマは、肉と霊の問題にあり、主人公の内的葛藤を通して、肉体にくみしようとする精神の働きを悪とみなす誤った純粋主義を糾弾している。「モイラ」とはギリシャ語で「宿命」という意味であり、ケルト語では聖母マリアを表わしている。また、物語の最後で、ジョセフに降り積った雪の中にモイラの死体を埋めさせ、「もしも、この雪が降り続くなら、僕は助かる<sup>22)</sup>」といわせている描写の仕方、神の恩寵を暗示する結末は、Gの『権力と栄光』との類似を思わせないでもない。

しかし、この作品を『アドリエンス・ムジュラ』と対比させて考えてみると、宗教的要素を盛り込んでいるからといって、より「カトリック的小説」であるとか、ましてや、小説としてより秀れているなどと思えないのは何故であろうか。

Jはモーリャックと同列に置かれる作家ではないだろうか。モーリャックのどの小説をとり上げてみても、Gのように、いかにもカトリック的と思われる作品はない。たとえば、出世作『愛の砂漠』 *Le Désert de l'Amour* (1925) は、夫婦、親子、兄弟が同一家庭内で生活をともにしながら、各々ふれ合う魂を持つことなく、孤立し、習慣的無為性の中に安住している。そうした中で、主人公マリア・クロス Maria Cross は、この倦怠から逃れるべく一人の青年に情熱をもやす。だが、それは不毛の愛でしかない。

『アドリエンス・ムジュラ』と同じ舞台、同じ枠組の中で、血縁的人物が演じているような錯覚を覚える。

モーリャックと並んで、同じくフランスを代表するカトリック作家といえばジョルジュ・ベ

22) J. GREEN, *Moira*, Le livre de Poche, Plon, 1950, p. 222.



ルナノスの名を挙げなければならない。しかも、この作家の場合、主要人物はきまって司祭である。たとえば、『悪魔の陽の下に』 *Sous le Soleil de Satin* (1926) に登場するのは農民出の若い司祭ドニッサン Donissan である。彼はGのウィスキー司祭のようないわゆる悪徳坊主ではないが、他人の罪をかぶり、その罪を贖うために生涯をささげるといふ点では共通している。元来、司祭というものがそうした職責を担っている人間であり、司祭が主人公の小説である以上、『権力と栄光』と何んらかの類似性があるのは当然かもしれない。ここでも問題になるのは、カトリックを主題とした作品だけが「カトリック的小説」なのだろうかということである。

同じGによって書かれたカトリック小説といわれている作品に、『情事の終り』 *The End of the Affair* (1951) がある。無神論者の小説家と愛人、そして愛人の夫の三人が主要人物であり、神を信じない小説家が終局的には神を求めるにいたる過程を描いている。

この作品は、これまでのGの小説の中では異色なものであり、司祭も出てこなければ、人を落とし入れる人物も、殺人者も登場しない。しかし、不思議に読者を魅了する作品であり、しかもまぎれもないカトリック的小説なのである。

ところで、以上のような観点から総合的に二人の作家の「カトリック的小説」を考えてみた場合、掲げるテーマが必ずしもカトリック的でなくとも、一見、宗教的色彩に乏しくとも、登場する人物がどんな人間たちであろうとも、その背後にカトリックの思想がみられる以上、それは「カトリック的小説」といえるということである。

それでは、彼らの小説を特徴づけているカトリシズムの思想は、その作品の中でどのように描かれているのであろうか。

#### IV

パスカル Blaise PASCALは『パンセ』 *Pensées* の中で、「人間は人間を無限に超越するものである<sup>23)</sup>」と述べているが、この言葉は「人間はたえざる自己超越においてのみ人間でありうる」と言い換えることができ、カトリシズムの思想も、自己を超越することからはじまるといえよう。

Jの小説の主題が、現実逃避 *évasion* にあるのも、Gの人物たちが、スリラーという今日的要素をとり入れた形式の下で「追われる人間」あるいは「追いつめられた人間」であるのも、これらはいずれも超越への一つの試みに他ならない。カトリック作家としての彼らは、現実を直視し、その現実からの逃亡＝超越の必然を説き、終局的には超越的な神の存在を立証しようとしているのである。

これまで述べてきたように、彼らの作中人物たちは、例外なく罪や悪に染っており、彼らの住んでいる世界もまた罪や悪に汚れきっている。人間はどうにかしてこの世界から、そうした

23) Blaise PASCAL, *Œuvres complètes*, Gaillimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1954, p. 1207

自分から逃れようとあがく。たとえそれが徒勞にすぎないということを知っていたとしてもである。両者の人物たちは、小説の中でよく夢を見る。夢は超現実的な世界である。とくにJの人物たちは、夢や幻想の中に、あるレアリテを求め、そこにおいて客観化された自己を見つめようとしているかのようである。しかし、Jの実際の小説では、人物たちは神を認めようとも、求めようともせず、死か狂気への道へと追いやられてしまう。Jはこうした神なき世界の人間を描出することによって、人間の力の限界を浮き彫りにし、超越者の力を暗示しているのではなからうか。だからこそ、宿命的な彼の人物たちは見えざる力=神といつも対決させられているのである。

この作家としてのJの態度は、ありのままの現実から目を背けることなく、その現実の中で生きる人物たちが、もがき、反抗する姿を描き、間接的に神の存在を実証することによって、カトリックに光をあてているとは考えられないだろうか。

この点、Gの姿勢も基本的には変わらない。ただ、彼の人物たちは、はじめからカトリック教徒であることが多い。したがって、彼らは、頭から神を無視することはできず、神を求める心を潜在的に持っており、その上自分の罪をはっきり意識さえしている。その好例がウィスキー司祭であろう。彼は自分が、永劫の罪に問われていることを十二分に承知しており、殉教者として死に、聖徒の列に加えられるなどは全く考えていない。罪を自覚しながら、酒を断ちきれず、物欲を抱き、他人より自分の娘に愛を覚えたり、処刑を明日にひかえて憶病者らしく少しも従容としないなど、悔い改めるどころかさらに罪を重ねている。それにもかかわらず、Gはこの司祭が聖徒になったことを暗にほめかしているのである。

Gが作中人物の罪責感を強調するのは、彼らにも光をあてる神の無限の愛を表現するためであろう。

また、カトリシズムの観点からいえば、罪を自覚するということが、神へ向って自己を超越するための第一歩と解釈することもできよう。

しかし、フランスのカトリック作家であるモーリャックもJも、Gに対してある当惑を感じているのである。

モーリャックは1949年に出版されたエッセイ<sup>24)</sup>、あるいは『権力と栄光』の序文の中で、神の無限の愛と不測の恩寵を描いているGについて、彼の小説の中には恩寵を見い出せるが、その現実性は非現実なところに存在していると述べている。この「非現実なところに存在する恩寵」が、モーリャックを惑わせていると考えられる。彼は次のように言っている。

「イギリスのカトリック作家カトリックになったイギリス人一の書いた作品は、いつもまず異国に來た感じ une sensation de dépaysement を私に与える。<sup>25)</sup>」(……は筆者による)

このように、Gはモーリャックに対して、「一概にカトリックの作家といっても、イギリス

24) *Mes Grands hommes*, Monaco, Rocher をさす。

25) François MAURIAC, *Préface de "La Puissance et la Gloire"*, Le livre de Poche, Robert Laffont, 1948, p. 7.

のカトリック作家は毛色が変わっている」という印象を与えている。

《une sensation de dépaysement》を、フランス的意味におけるカトリックの伝統が、Gの作品の中には見られないためと考えればそれまでであろうが、カトリシズムの思想が徹底していないとも受けとれるのではないだろうか。

「彼は全くの未知の王国，人跡未踏の自然の王国，恩寵の王国の中に，物の見事に忍び込む<sup>26)</sup>。」

「神の権力と栄光は，突然天より降り，地上に啓明された。ところが，その栄光に浴したのは，何んとのんだくれの上に自分の教区の女と関係するという，とんでもないメキシコのカトリック司祭だった<sup>27)</sup>。」（・・・は筆者による）

このように，モーリャックの驚きは『権力と栄光』の序文の中で，くりかえし述べられている。しかし，彼の場合は「私は魂の故郷をそこに見出しはする<sup>28)</sup>」とGのこの作品を称讃する態度をとっている。

JがGについて語っているのは，『日記』の中で，ただ一個所，それも数行にすぎない。

「メキシコを舞台にした作品の中で，Gは二つの罪の間で告解が与える平穏について書いている。それは幻想ではない。しかし，別の作品では，長椅子に横たわる娼婦について語り，彼女らをただ単に《lovery instruments sexual》と呼んでいる。快楽を追い求める人間は，女たちを性的道具にし，一つの機能とみなし，極端に単純化している。そこでは精神をともなった肉体というものは，もはや存在せず，単なる肉体，しかもそれはしばしば局部だけの肉体になっている<sup>29)</sup>。」

肉と霊の霊的部分をないがしろにしているGの人間に対する見方を暗に批判している一文として注目されよう。

モーリャックもJも，一応『権力と栄光』に対しては肯定しているものの，どこかにGのカトリシズムを奇異なものと感じているふしはつきりみてとれるのである。カトリシズムが骨の髄まで浸み込んでいるフランスのカトリック教徒の目には，聖性と恩寵が途方もない形で訪れるという，考え方によつては技巧を凝らしすぎたGの「カトリック小説」は，絵空事のように映じていると言つてはいいすぎであろうか。

フランスの現代カトリック作家といわれる人々の作品の根底には，必然的にカトリシズムの思想が脈打っているとはいえ，彼らは宗教家ではなく，ましてや護教論者でもなく，「カトリック小説」も書かない，あくまで純然たる作家であつて，いわゆる「カトリック作家」ではないという見方もできよう。すなわち，カトリシズムの思想は，誰れにでもわかるような形で必

26) *Ibid.*, p. 7.

27) *Ibid.*, p. 8.

28) *Ibid.*, p. 7.

29) J. GREEN, *op. cit.*, tome II, p. 1422.

らずしも明示されているとはいえ、したがって、読者のすべてがそれを彼らの作品の中に読みとることができるとはかぎらないということである。カトリック教徒ではなく、神の愛や恩寵の実存を否定する非キリスト者であっても、それらしきものが存在することを認めないわけにはいかないようなGの「カトリック小説」との間には、大きなへだたりがあるといえよう。

## 結 論

以上述べてきたことから明らかなように、現代文学とカリトシズムの問題は多義にわたっており、一概に論ずることは極めて困難である。しかし、その主流をなしているのは、やはりフランス文学であろう。実際、各国の文学の歴史をひもといてみても、アメリカ文学の中にその系譜を見出すことは無理であろうし、イギリス文学にしても、アメリカの場合よりはいくらかカトリックの影響がみられるといった程度にすぎない。

イギリスを代表する作家は、ここでとり上げたGとイヴリン・ウォー Evelyn WAUGH であるが、プロテスタントからの改宗者であるこの両者の文学には、神学上、疑問もあることから、本格的な意味でのカリトシズムの思想は息づいていないと考えられる。

現代におけるカトリック文学が、まず人間の存在自体に罪があるという、いわば原罪を認めることから出発しなければならないという主張は理解できなくもないが、この問題にしてもカトリック文学の専売特許ではなからう。今日の社会そのものが狂気と不条理の中にある以上、その現実を熟視している現代の作家が、そこに巢喰っている罪なり悪を見逃がすはずは決していない。その罪や悪を原罪とみなすか否かは別にしても、ドストエフスキー Fédor DOSTOÏVSKY が、あるいはカミュ Albert CAMUS が描いたのも罪深い人間の姿である。

このように、罪に対する認識は、現代作家にとって避けて通ることのできない関門なのである。彼らは、人間がこの現世において罪から逃がれられないことを知っている。したがって、究極的には、ドストエフスキーやカミュとカトリックの作家を区別するのは、この罪の認識が社会と個人か神と個人の関係にあるのかということになるのであろう。

Jはあらゆる宗教の源泉は恐怖にあるといっているが、ここに原罪の意識がある。そして、宗教とは人間を越えた世界、超自然の世界に存在するものであろう。JやGの人物たちが、成人した後もどこかに子供らしさを残しているのはこのためであろう。何故なら、聖性という超自然的な明察の力が与えられるのは、幼児の持つイノセントにおいてだからである。

Gのエッセイの題名『失われた幼年時代』*The Lost Childhood* とは、「神に見失われた」とか「神に見捨てられた」という意味であろうし、またJが第二の改宗後の作品において、幼年時代への回帰を描写する部分が多くなっているのも決して単なる偶然ではなく、幼な子のイノセントを希求する気持のあらわれと考えるべきであろう。

一般にキリスト教徒の人間観は、善と悪との対立関係によって支えられているといわれている。ルネッサンス以前の精神共同体的支柱を失った現代のカトリック作家たちは、「カトリッ

ク者としては、悪をさけたが、芸術家としてはこれを選ばねばならぬ<sup>30)</sup>」と考えざるを得なかったのではなからうか。

『二十世紀文学とキリスト教』 *Littérature du XX<sup>e</sup> siècle et Christianisme* の著者シャルル・ムウレ Charles Mœller は、カミュ、ジッド、ハックスレー Aldous Huxley などとともに、JとGをとり上げ、この両者の小説の特色を一言で「神の沈黙」と「神の不在」にあると指摘している。神の沈黙とは神の真の声であり、神の不在とは神の实在を示唆しているのであろう。

現代カトリック作家として、改宗者ではあっても伝統的にカトリックの国フランスで育ったJには、神の沈黙した世界を描き、言外に神の声を匂わせるにとどめるのが精一杯だったのであろうが、プロテスタントの国のGは、「神の不在を探ぐれば探ぐる程、神の存在や神の行為を見出し」「神に対する憎悪が強ければ強い程、神を信じていることだ」というように、ある気負いはみられるとしても、聖性や恩寵の実存を作品の中で表わすことができたのであろう。

しかし、Gのように聖性や恩寵というカトリック的要素を作品の中に織り込んでも、何か虚しさを感じさせるのが、現代という時代性であろう。

彼らが、表現の違いはあっても、「神の沈黙」と「神の不在」を描かねばならないところに、今日のカトリック作家として、この二人のグリーンがたどる不可避的命運を見るのである。

そして、「悪をも秩序だてる新しい美の創造と人間と人間をむすびつける精神共同体の再建<sup>31)</sup>」に、現代カトリック作家の究極の目的があるという遠藤周作の言葉は正鵠を得ているといえよう。

30) 遠藤周作『キリスト教と文学』日本キリスト教文学全集18, 教文館, 1974, p. 24.

31) 前掲書, p. 24.